

国際業務の 窓辺から

CLAIR 経験者からの
メッセージ



「暗」の1年から得たもの

埼玉県県民生活部国際課 小原 一晃

突如始まった「暗」の1年

シンガポールでの2年間は、公私ともに思い描いていた通り過ごせた前半1年と、コロナ禍で理想とほど遠かった後半1年にはっきりと明暗が分かれました。

2020年4月3日、首相がロックダウン（Circuit Breaker、以下CB）を発表した直後の事務所内の静まり返った空気を、いまだに忘れることはできません。

4月7日から約2か月間続いたCBでは厳しい行動規制があり、日用品の買い出しさえ躊躇するほどでした。CB後も緩やかに続いた行動制限により、会食やイベントなど交流の機会が限られ、現地での人脈構築という赴任当初の目標は十分に達成できませんでした。

「暗」の中で生まれた変化

前半1年と決定的に違ったのは、「『知らない』では済まされない」という危機感でした。自分の生活や事務所の業務に直結する規制には、「Fine City（＝罰金大国）」と揶揄されるシンガポールでは罰金はもちろん最悪の場合、在留資格のはく奪、国外退去などの重い罰則が伴います。

現地新聞はもちろん、政府の公式発表、時には法律の



CB中の人が消えたショッピングモール（2020年5月）

条文まで調べ、自らを守るためにルールを詳細に知る必要性に迫られたことは、前半1年間で日系コミュニティに染まり、日本語で情報を得ることが当たり前になっていた私にとって、大きな転機になりました。

日々ストレスを感じながらも徐々にそうした環境に慣れていくうちに、政府の高い政策立案能力と発信力という別の発見がありました。新たなルール一つ一つが明確な根拠と目的のもとに設計され、柔軟に見直しが行われているだけでなく、外国人の私にも理解できるようわかりやすく発信されていたのです。民間企業の駐在員ではなく、行政職員としてシンガポールにいたからこそ、制限の中でも日々学び、視野を広げることができました。

現在は埼玉県国際課で姉妹州省との国際交流を担当しており、現地の情報収集など日々の業務においてシンガポールで得たものが役立っています。

思い通りにはなりませんでしたでしたが、思いがけない収穫があったシンガポール。いつか再訪することを楽しみに今後も注目していきたいです。



自動販売機による住民へのマスク配布。IDカードを右側の端末にかざすことで24時間受取が可能。（2020年6月）

プロフィール・ほか

- 現所属 埼玉県県民生活部国際課 国際戦略担当
- クレア在籍から現所属まで
2012～2014 業務部支援課
2018～2019 総務部企画調査課
2019～2021 シンガポール事務所
2021～ 現所属